
The second select from EVA

作者さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The second select from EVA

【Nコード】

N5037F

【作者名】

作者さん

【あらすじ】

サードインパクトの起きた世界。そこで少年は生きていく決意をした。そして、次の時間を生きる人物のために自分の全てを託した。これは新世紀エヴァンゲリオンを下敷きにして作られた二次創作です。

プロローグ（前書き）

多少矛盾があるかもしれませんが、頑張るつもりですので、よろしくお願いします。

ブローグ

…僕は何故こんなところにいるのだろう。

その問いを答えてくれる人間はこの場にはおらず、聞いてくれる人さえもないこの場所は、どこでもない、世界そのものだった。

どれだけの時間を自分がこうして座っていたかもよく覚えていない。目の前にあるのは紅い人間だった物の最後の姿となった液体。これ自体が全ての生命であり、1つの生命である。長い時間は苦痛にもなるが、それとは反対に多くの考える時間を与えてくれる。それだけが唯一の救いなのかと少年はふと考えた。救いなどと生易しいものではないと自覚していないわけではないが…有り難いことには代わりない。理由としては今までの自分には考える機会がなかった。それは多くのものを考えるには少なすぎる時間であり、今の自分にはそれだけの時間がある。

今更、とも言いかもしれない。だけど考えることを放棄してしまうよりはマシじゃないかと自分を納得させた。第三新東京市、そう呼ばれていた目の前に見える残骸に対して、別に特別な感情が浮かぶわけでもない。

しかし、何年、いや何十年たったとしても、ここであつたことを忘れるわけがない。

本当に嫌なら逃げてもいい。だから逃げてしまった。前を見ようとしなかった。自分の道を一緒に歩いてくれる人が居なくて、怖かったから。

逃げた結果が最悪かどうかは分からない。勿論今よりも良い結果はあつたかもしれないが、今ここにあるのは現実しかない。

もし、あの時…をしていたら

もし、…が…だったりしたら

そんなことを考える事に意味なんて無い。だからこそ考えていた。

なぜ、こんなことになってしまったかということ。

自分の歩いてきた道に間違いは無かった。だけど正解もない、だからどこがどう悪いなんてことは一言では言うことはできない。それは自分を否定することだから。

僕はなんでエヴァに乗ったのだろうか。

居場所が無かったから？自分の居場所を定めたかったから？

違う

父さんに認めてほしかったから？

あり得ない

他にいく宛が無かったから？

…その発想は無かった。

それじゃあなんだ？世界を守るため？

この世界に自分が身体を張って守るほどの価値がある？

…それじゃあ、綾波のため？

………。

綾波レイをただ助けたかった、守りたいと思った。だからエヴァに乗った。違うか？

…違う。それは後から付けられた理由で、僕がエヴァに乗ろうと思った理由にはならない。

じゃあなんで？なんで僕はエヴァに乗った？なんのために。

………。

じゃあ…何で逃げなかった？人は苦しいこと、嫌な事から逃げてもいい。それが本当に自分を蝕み、縛り付けるなら、逃げてもいい。

だけど逃げた先には何も無い。だから僕は逃げなかった。

…まって、じゃあ何から逃げなかったんだ？

………え？

逃げるって何？どこにどうやって逃げるつもりだった？そもそもそんな選択肢が自分にあっただの？

…あった。あの時僕は逃げなかった。傷ついた綾波を見て…逃げちゃダメだと考えた。

…逃げちゃダメ？そもそも逃げる場所なんてなかったじゃないのか？
いや、あったよ。あの場所で綾波を見捨てて、どこか安全な所に逃げてしまうことができたじゃないのか。

だけど逃げないことと、戦うことは同意義にできない。それは常に同じ場所に在るもので、イコールで結ぶことなんてできないから。

……………。

もし、あの場所で僕の言う、逃げる、ということをしたとする。そうした場合には、逃げた先の戦いそれが必ずある。

逆に考えてあの時自分がエヴァに乗ろうと思ったのは、自分に逃げる勇気が無かったから。逃げた後の罪悪感と戦う勇気が無いから。だから逃げた。エヴァに乗ると言う選択肢に。

……………それはおかしいよ。だったら自分には逃げるしかないじゃないか。どんな選択肢を選んでも正しいなんてものはないよ。

…そうだった。正しいなんてものはこの世界には無い。

だから僕は自分で考えて自分で決めた。自分が今、正しいと思える選択肢を。そうすれば少なくとも自分が後悔する事だけはないから。

…もしかして、これかな。

……………？

自分が後悔したくない、僕がエヴァに乗った理由なんて、それだけじゃないかな。誰のためでもない、自分のために。

…そうだね。選んだ先がどんなかは分からなかったけど、もしかしたら良い選択だったかもしれないから。それに期待したかったから。だからエヴァに乗った。

…でもそれは真理だ。

人間は本当に他人のために生きることなんてできない。そんなことを本気で言っている人間は、それこそ偽善者、嘘つきのどちらかしかない。

そして結果は出た。

だけどこれは間違っていない。

ここには自分で決めた結果がある。だから僕は歩かなきゃならない。

逃げちゃダメだ。現実から目をそらしてしまうことも、安易な選択肢に逃げてしまうことも。

ここには過去への巻き戻し。それを出きるだけの道具や力はそろっている。それはもう一度戦うこと、ここから逃げ出すということの選択肢がを表している。

ただどあえて僕はその選択肢を捨てた。

現実と戦うと決めたから。現実から逃げないと決めたから。だからあがいてやる。

シナリオに乗ってここまで進んでしまった世界でも、…僕には希望がある。

「…神…児…？」

「…何でもないよ、アスカ」

捨てて逃げてしまうことなんてできるものか。

歩む道が一人…いや、独りじゃないなら、僕はどこにだって進んでやるさ。

それがどんな険しい道だったとしても、人が本当に歩く道なんて無いのだから。

僕はこの選択肢を選んだ。

だけでもう一度僕と同じ選択を選ばなければなくなる人がいたとしたら。

僕は選んで欲しくない。

できれば回避してほしい。そう思う。

だからこそ僕は“コレ”に全てを託すつもりでいる。

この星もいつかは滅び、銀河も滅び、宇宙さえも消えて無くなってしまうだろう。

だけど“コレ”だけは無くならない。この星の人類、いや、僕がここにいた証として、ずっと世界に存在し続ける。

僕の望んだ人物の手に渡る可能性は、小数点を無限に近いほど並べた数よりも少ないだろう。

だが、0%ではない。

だから願ひ続ける。

その人物が、自分にとって、最高の選択肢を選んでくれることを。いつの日か、自分が望めなかった未来を手に入れてくれるように、と。

「じゃあ、行こう。アスカ」

其ノ一 ハジマリはオワリ（前書き）

…進まない。

文がとても難しいと思ってしまつ今日この頃です。

其ノ一 ハジマリはオワリ

「まもなく、第三新東京市へ、第三新東京市に到着します。」

電車の揺れる音が子守唄のように響いて、つい眠っていたんだとアナウンスを聞いて理解した少年は、まだ霞んだ景色を見させている目を擦り、自分の身体を起こした。

ぼんやりとした頭を何とかはつきりさせて、降りる準備をしようと少ない荷物を確認する。

…ずいぶん、長い夢を見ていたような気がする。

海… そうだ、海に二人、誰かがいたんだ。

一人はよく分からない、もう一人は… そう、なんて言えばいいんだろう、表情だけ分かったんだ。

自分のやるべき事を考えて、先に進もうとする、全てに向かっていき、後悔したり逃げ出したりしなないと決意した目。

… どうでもいいか。夢の中を考えるのはなにもしない暇なときでいい。やるべきことをやってしまおう。

そう考えた少年だが、少ない荷物をわざわざ確認するのに時間など必要なく、自分が持ちぶさただったことに今頃気がつく。

外の風景を見たいとも思わなかったし、だから寝ていたのに忘れるとは…。結構深い眠りについていたのかもしれない。

しかし電車の止まる感じが身体に感じたことから、ようやく到着したんだと理解して、開いた扉に向かって歩き出す。

車掌さんにお金を渡し、椅子に座ったままの身体を伸ばしながら、とりあえず指定場所に移動しよう考えた時だった。

カラン

小石がコンクリートに落ちたような音が耳に響き、思わずその方向を見た。

落とし物だ。自分意外にも降りた人はいくらでもいるから、誰かが落としたものだろうと分かる。

だが周りの人は一目見ても、ゴミだと考えて放置している。

少年はその落とし物の方向に歩き、それを拾った。

…石でできた十字形の飾物だろうか。灰色でくすんでいるにも関わらず、石工している人が作ったかのように表面が平らで、落ちたはずなのにヒビがひとつも無い。

辺りを見渡すと、行き来する人は多くいるのに、この石を拾った自分を眼中に入れている人間は一人もない。

持ち主に忘れられるほどの物となると、流石に無機質とはいっても哀れみがわいてくるような気がする。

「……………」

少年はその石をそつとズボンのポケットに入れた。

理由はない。どんな人間でもよくある、なんとなく、という行為だということとは少年自身も理解している。

だけどポケットの中で冷えているこの石は、よく日照っているこの日には心地よく感じた。

…それにしても…だ

見事なぐらい、迎えが遅刻している。…どういうことなんだろうか。通常約束を破るような人物を超越するぐらい、父の仕事場には人材が無いのだろうかと悲しくなってくる。同情する気は更々無いにしても、自分が関わるとなると、心配せざるを得ないのだから。

…父は…今更自分に何の用があると言うのだろうか。

10年以上自分を伯父の家に置いたままほったらかしにしていたくせに。

一般的に見ても整った顔つきをしている少年でも、溜め息をついていると、途端に周りの空気が冷えていくように感じる。

さらに周りに聞こえるのは人々の声などではなく、

「緊急警報、緊急警報をお知らせ致します。本日12時30分、東海地方を中心とした関東中部全域に特別非常事態宣言が発令されました。住民の方々は速やかに指定のシェルターへ非難してください。繰り返しお伝えします。速やかに指定のシェルターに避難してください。」

無機質な女の声だけとくる。

イライラすることこの上ないことだと思うが、どうしようもないので溜め息にストレスを混ぜて吐き出した。

正直父に会えることなんてどうでもいい。自分を置いていったのも、自分のやりたいことの障害に僕がいたのだから、考えてみれば仕方がないのかもしれない。それは人間には必ずあることだから、偶然自分に重なっただけのこと。その結果僕がどう考えたとしてもそれは後から付けられた結果にすぎない。

だが、そのことと自分の怒りや悲しみ等はまた別の話だろう。

おそらく父を殴って良いと言われたら、メリケンつかってマウントとって制限時間いっぱいまで殴り付けるだろうから。

まあそんなことはできないだろうと始めから分かっているから、なんの用事で呼ばれるかは非常に気になる。

…そこまで考えてふと顔をあげると、陽炎が見えるぐらい熱いられた道路があり、また溜め息をついた。溜め息以外にすることは無いのかと言いたいけど無いんだから仕方がない。

しかし見えるのは陽炎だけかと思いきや、違うもの、有るはず無いものまで見えてきた。

暑すぎてついには脱水症状になったのだろうか。しかしそういうわけでないのに関わらず、しっかりと視界にある。

「……綾…波……霊？」

口から漏れた言葉がそれだったことに驚いた。誰だそれは。どこかの雑誌か、教科書か、もしくは友達の名前か。

そう考えて顔を上げると、そこには誰もいない。

…なんだったのだろうか。考えてみても仕方がないので、とりあえず移動して指定場所より先に行こう。

そう考えた時だった。

カシャ

何の音だろう、そう考えた時にはもう風景の色彩が一気に反転して、気持ち悪い感触が脳内を駆け巡っていた。

『あれはね、使徒よ。今は詳しく説明しているヒマは無いわ』

カシャ

『お父さんのこと、苦手なのね』『……別に……。めんどくさいだけです。会ってもどうせギクシャクするのは目に見えていますし』

カシャ

『人の造り出した究極の汎用決戦兵器！人造人間エヴァンゲリオン。我々人類の最後の切札、これはその初号機よ』

カシャ

『お前など必要ない。帰れ。人類の存亡を賭けた戦いに臆病者は無用だ。』

カシャ

『レイ、予備が使えなくなった。もういちどだ』
『……はい……』

「……!？」

立ち上がろうとした足に力が入らず、反射的に手を前に出してつんのめる状態になった。

…なんだ、これは…。

次々と写真のスライドのように見える光景には、必ず自分がいる。違う、僕じゃない。誰だ、誰かの記憶…違う！

そんなわけがない、デジャブだとかそんなレベルではなくて、はつきりと体験している。だけど自分じゃない。だって自分はここにいるのだから、記憶に残っていないものを自分が体験したわけじゃない。

じゃあなんだあれば！自分じゃないとしたらなんであんな記憶が有るんだ！？

…分からない。さっきの幻影みたいな人物も出てきていたし、確かに変わらない姿の父さんもいた。気持ちが悪い、水が欲しい。

自分の荷物からペットボトルを取り出して、その中にある水分を口に少し含んで飲みほした。

バ力になった視覚や聴覚が戻ってくる。

いったいなんだったのだろう、そう考えようとした時には、もうそんな時間が無いことを周りの現状は知らせていた。

最初に視界に入ってきたのはものすごいスピードで自分の前を横切っ
て見えなくなった破片とくると、何が起きているのかさっぱり分
からない。

だが視覚でダメなら聴覚がある。

しかし聞こえるのも、単調とは言わないが、どちらかといえばオー
ケストラのように何回も響いている爆発音とミサイルの発射音。

意味が分からない。さっぱり分からない。だれか説明できる人を呼
んでください。

よし、あれだ、ひょっとしたら特撮映画みたいな巨大生物が攻めて
きたとか。ほら、さっきの意味分からない現象が起きたときに見え
た、使徒とかいう怪物だったりし…………。

少年は二つの意味で驚愕した。

ひとつ目は特撮映画ばりの不細工な首なし巨大人間が視界に入った
こと。

もうひとつが、さっき見た、ということだ。

…色々驚くことはある。しかし驚いていていつの間にか破片が頭を
貫通していたなどといったら洒落にはならない。

とりあえず逃げよう。シエルターに。多分軍の方々がなんとかして
くれるだろうから…。

キキイ！！

「おまたせ！碇シンジ君ね！？」

…………… 良いところにタクシーが来たものだ。この女性は写真やさ
っきの不思議な現象でも見たような気がするけど、きのせいだ。う
ん、行き先がシエルターか天国かは未定だけど、なんとなくなるさ。
近くで爆発だんだが起こっているにも関わらず、平然な表情をし
ている少年に相手は驚きはあるだろうが、人とは自然じゃないこと

を受け続けると冷静になるらしい。なるほど、新しい発見だ。

「とにかく時間は無いわ！早く乗って！」

とりあえず得策は車に乗ることだ。

そう判断したシンジは、さっき地面においた荷物を手にとって車の中に滑り込むように入り込んだ。

勿論その瞬間には車は発信している。…まったく、恐ろしいタクシーに乗ってしまったものだなあ。家でやっていたゲームが懐かしいこの人は…たぶん葛城ミサトさんだと思う。父から貰った手紙に写真が付いてあって、それに写っていたのがこの人だったから。年齢は二十代も後半あたりに来たぐらいかな？少なくとも四捨五入したら30歳ぐらいにはなるだろうし。

まあひたすらどうでもいい。あの使徒とかいう怪物も、怪物は怪物であってそれ以外に何者でもないのなら、自分にできることなど無いではないか。つまりどうでもいいと言わざるを得ない。ならばすべきことは一つ。

「あ、通りがかりにすみませんが、行き先はシェルターまでお願いします。」

「…えっと、それは大真面目なのか、ボケてるのかはかりかねるところがあるんだけど。とりあえずシェルターには向かわないから。」まあそうだろう。分かっていたけど結局父と対面することになってしまうということか。

溜め息は何回ついても無くなるものではない。だけどタダより安いものは無いと言うように、そのあとに出てくる憂鬱な感じは押さえようがないのが欠点だ。

「落ち着いているのね。」

突然かけられた声かけに対して、

「何がですか？」と無難な答えを返しておく。

「そういうところよ。見たところあの怪物を見ても驚いた様子も無いし。」

ああそのことか。

なんというか……うん、なんだろう。上手く言えないけど……。

「いえ、内心驚いているんですけど、驚いていて解決するわけでもないですから。」

なんにしてみても安全にたどり着くことができるのだろうか。極めて難しいと考えられるのも、あそこで暴れている首無しのせいだと思う。

窓越しに首無しを見たシンジは、第一印象としては気持ち悪いということがメインに感じる。

二つ目に考えたのは、何故あんなことをしているかと言うことについて、疑問が出てきた。

これは一般的な考えだと思うけど、的確なヒーローものの特撮などでも、町を破壊するなどの行為は、何らかの意図をもってするものだと思う。

それが無いのは、本当に単細胞な怪物だけだ。……まあたしかに考える脳みそがどこにあるか分からないし、ただわけも分からず暴れているとしたら、本当に都合のよい場所に來てくれたものだ、また落胆を溜め息に混せて吐いてしまった。

なんにしてみても僕が考えることじゃない。流れに身を任せればなんとかな……あれ？

「やっぱー!!」

相変わらず慣れることがない高い女性の声、まあ葛城さんの声なんだけども、流石に状況判断が遅れたのは言うまでもない。

10mぐらい先の所でミサイルが爆発したと思いきや、何かを考える前に視界が反転していた。

流石に発達したミサイルの爆風となると、車でも簡単にひっくり返るものだなあ。

ぼんやりと考えつつも車内から外に身体を出す。葛城さんも同じように出てきたけど、恐らくべこべこになった車を見たら落ち込むだ

ろくな。

とりあえず埃を払って、外に出てしまった荷物を拾う。今日はいつも以上の厄日だと身体全体で感じる事ができたよ。

「――シンジ君、危ない！」

まだ身体を起こしている最中の葛城さんがそう叫んだ。

え……なにが？

辺りが暗くなり、何かと思つて空を見た……。

………首無しが、何故か分からないけどピンポイントでここに着地しようとしている。

………なんでわざわざここに？危ないって言つても回避不能ではないですか？葛城さん。

ああ、振り返る過去さえもない。やっぱり……今日は厄日だ。

刹那、それを妨げるかのように現れたもうひとつの影。

それはとても大きくて、何か懐かしいものを感じるような大きな機体だった。

懐かしい……記憶にある……。……デジャブとは言つても限度が有るんじゃないかな。もしかして未来余地ができるようになったとか……。

「……も……もう一体増えた……？」

「違うわシンジ君。これは味方よ！」

そのロボットはおもむろに葛城さんの車を掴んで、元の走れるように起こした。

なるほど、確かに味方らしい。

僕はロボットの顔の辺りをまた見返した。心なしか相手もこちらを見ているように感じたから。

……誰かが乗ってる？いや、考えても仕方がないことだ。

「いけない、時間がないわ！さっさとここから離れるわよ！」

何かを聞こうとする前に無理矢理襟首を捕まれたのでは、質問が「グエ！」の一言唸ることに変わるのは当然のことだった。

放り込まれるように車に入れられて、なんとか空気が入って働いた

頭が示したことは、シートベルトをするという当たり前のこと。

しかしギアが切れるんじゃないかと思えるぐらいの加速に身体が引っ張られたことから、正しい選択だと思う。

なんとか姿勢を直して、窓越しにさっきのロボットを見ようとしたけど、視界には入らなかった。それは首無しに蹴られたロボットが飛ばされて、大きく移動したからだとなんとか気が付くことができた。

「一方的じゃないか……」

なんとか自分たちを助けることができたということだけがプラスなこと、なすすべもなくやられているのを見ても、上手く動いていないのは一目で分かる。

「ヤバイ、時間がないわ！顔を引っ込めて対閃光と衝撃にそなえて……！」

もうどうにでもなれ！！

そう思っただけでもどうやったか分からないけど頭を庇って伏せて、衝撃波にだけ備えようと心がけた……。

視界が真っ白になってから轟音と衝撃波が来るまで、そうかからなかった。

地球を壊すんじゃないかと思われる爆発だけでも、今のシンジから見えるわけがないので、ただ口の中で言葉にならない叫びをあげていたことだけ覚えている。というかそれ以外に何も分からなかった。

「……厄日だ。」

「……厄日ね。」

よく分からない姿勢だけでも車が転倒したんだとは分かるだけだから、またまた溜め息をひとつ吐くついでに、この言葉を絞り出した。

とりあえず助かったとは言えないけど、感想としては上出来の言葉
だと、たぶんそう思う。

其ノ一 ハジマリはオワリ（後書き）

中途半端…ですが次回に予想道理のことをもってくるんじゃないか
と思います。

其ノ二 エヴァ、父、自分（前書き）

…気持ちを…書きにくい。

長くなっていますので、お暇な方はどうぞ。

其ノ二 エヴァ、父、自分

「…特務機関…ネルフ…ですか。」

「そ、国連直属の非公開組織。私もあなたのお父さんもここに所属しているの。」

よくここまでこれたなあ。

第一感想はその一言につきる。

やっと安全かと思える場所に着いたとき、大きく息を吐き出した。もちろん溜め息ではない。久々の安堵の息だ。

機械仕掛けで勝手に動いている周りの風景を見ると、少し前までこれらが無かったことに驚く。実際そのおかげで葛城さんの運転を味わらなくて良いと聞くと、嬉しいことこの上ないのだけれども。

「葛城さん、なんで父さんは僕を呼んだんですか？本当に今更の話なんです。」

そう聞くと、葛城さんは少し考えるような仕草をした後に、

「…そうね…、それは直接聞いた方がいいんじゃない？」と、そう答えた。

分かった。そんなことを他人に聞いたとしても、伝えてくれる人はいないだろう。だけど心の中でどこか期待していた自分が嫌になり、ふう、と小さく溜め息をついた。流石に相手がいる前では失礼だから。

「…お父さんのこと、苦手みたいね。」

「…そうかもしれませんが。会って何を話すべきかも分かりませんし…何を考えているかも分かりませんから。」そう言うと、また葛城さんは考えるような仕草をしてしばらく黙った。そして何かをひらめいたような表情になり、こう言った。

「それなら、父さんと話すみたいじゃなくて、知り合いの大人と話すみたいに会話したらどう？」

他人から何か本当に必要なことを助言されたのは初めてだから、

少しだけ驚いたあと、その案を考える。

「…他人みたいに…ということですか？」

「うーん、ちょっと違うかな。司令つてやつぱり用がある、って言うと話すことが少ないから、お父さんだと思つと少しキツイ部分があるから…。ゴメン、私が言うことじゃないわね。」

「いえ…ありがとうございます、」

父さんの考えていることは今も昔も変わりなく意味不明だ。できれば心の準備だけはしなければ…

機械が車を運送している音が聞こえてやっとなんやりとした感じから戻ってきた。

会つて見なければ分からない…か。会話できる自信が無いけど、とりあえず動揺だけはしない。それだけは決心したつもりでいる。

…とは言ったものの、たどり着ける気配が無い。

機械に運送されて、ジオフロントの中に入ったところまでは覚えてる。

本物のジオフロントに来たとなると驚きも多少あつたけれども、むしろ葛城さんの土地勘の無さの方がかなり驚きがある。

同じ場所を回つて三回目ともなれば、右側の壁に手を当てて沿うように歩いた方が目的地につくんじゃないかと思つてきた。

正に人選ミス。

葛城さんがまともでないと言うわけではない。しかし人選をしつかりしていれば自分の死亡率も低くなつたんじゃないかと改めて本気で考えた。

「…葛城さん、さっきそこを右に行きました。」

「嘘お！？…じゃない！大丈夫、たぶん合つてるハズだから。」

…そのセリフ、何回目ですか葛城さん？

「…二人とも、何処に行くつもり？」

背後でドアの開く音と女の人の声が聞こえて、やっと迎えが来たんだと有りがたく思う。

むしろ探知機をつけるべきだと思います。声には出さないけど思うだけなら自由だろう。

「…また迷ったのね。時間が無いんだからゆっくりしている暇は無いのよ。」

金髪で白衣を着た綺麗な女性。それがこの人のイメージだ。

「ゴメン、リツコ！ちよっと迷っちゃったのよ。」

ちよっと？……もう何も言うことは無い。

「その子が例の三人目の適格者ね。」

サードチルドレン。聞き慣れない、いやさつき聞いた単語は、やっぱり英語の心得が無い人が考えたのだと思う。三人目の子供達……かなんのことだろう。

「はじめまして、碇シンジです。えっと……」

「赤木リツコ、よ。肩書きは技術一課E計画担当博士よ。よろしくシンジ君。」

頼りになる。マイナスを見続けると、プラスが大きく見えるのは気のせいじゃないんだろうなあ。

「ついてきて、シンジ君。お父さんに会う前に見せたいものがあるの。」

「…見せたいもの……ですか。」

「総員第一種戦闘配置。繰り返す、総員第一種戦闘配置。」

警戒音と無機質な女性の声は聞いて慣れるものじゃない。

嫌なものから逃げるようにシンジは目をつぶり、この光景から思い出せること探してみた。

デジャブ、ではない。未来余地と言うわけではない。なぜなら自分が見た記憶とは食い違う所があったのだから。

ポケットの中をまさぐり、駅で拾った石を握りしめた。

かくばった石は手に刺激を与える以外、冷たいという感触しかない。

…そう、あの少年も

同じように不安定だった。感情に揺れて、自分で決めずとにかく流されていた。

…あれ？おかしい。電車の中で見た少年と、わけのわからない記憶にある少年のイメージが一致している。

あり得ないと内心で思った。

決意をあらわにしていた少年と、とにかく感傷的な少年。同じな訳がないと思えば思うほど、イメージが一致する。

…だめだ。詳細まで思い出せない。

そう考えてシンジは考えるのを止めた。

理由としては目的地と言える場所についたことと、ぼんやりと見えた半身浴しているさっきのロボットに驚いた、と言うことだろう。

「これは…。」

「人の造り出した究極の決戦兵器！人造人間エヴァンゲリオン。人類の切札、そしてこれはその初号機よ。」

……………。

まさか、だ。ここまで一致するなら次に僕が言うべき言葉は決まっている。

だけど無駄なことはしないと思い、シンジは視線を少し上に上げて、そこにいる人物に合わせた。

「久しぶり、父さん。」

「…ああ。」

シンジの目線の先には、確かに今日ここに呼んだ人物がガラス越しに見えていた。

「シンジ、これから私の言うことをよく聞け。」

「……………」

「これにはお前が乗るのだ。そして使徒と戦え。」

…やっぱり。ここまではあの少年と進み方が一緒なのか。

内心で苦笑する。こんなにも言うことを理解していると、受け入れられるものなのか、と。

「待つてください司令！レイでさえシンクロするには7ヶ月かかりたんです。今日きたばかりのシンジ君にはとても無理です！」

そんな感想が他人事のように頭から出てくる。

こういふ人だ。予想できたと言っても嫌なものだと思う。

「アに少しでもシンクロする可能性のある人物に乗ってもらうしかないのよ。」

そう……か。結局父さんが呼んだ理由はこんなことだったのか。

…ははは、そう…か。

本当に久しぶりに腹の底から笑った気がする。

おかしかったから。それ以外に理由なんて無い。

「ハハ、…だつて…母さんが死んだ後に僕を捨てて何を造つていたかと思つたら…。こんなくだらな玩具を造つていたんだから…。しかも僕にこれに乗れ？使徒を倒せ？何をしろと言われるかと思つたら…人形遊びをしるつて言うの？笑わないほうがおかしいよ。こんなの。」

情のままでこちらを見続けている。

れない。

それはだいたいあっているし、自分だってここに来るまでそんな言葉を使うとは思わなかった。

玩具、という言葉に赤木博士がムツとした表情になることや、葛城さんが驚きを隠せない様子が分かったけど、正直どうでもいいという言葉で締め括る。

「説明を受ける。お前の肩に人類の存亡がかかっている。」「そんなものは勝手に父さん達が僕に乗せただけじゃないか。僕はそんなものを持ちたいとは思わないし、持とうとも思わない。だいたい父さんは、そんな人が背負えないものを子供に持たせなきゃならないほど、情けない人間だったとは思っていない。そう言えるほど父さんと関わりがあるわけじゃないけど。」

父の言葉をバツサリと斬り捨てたとき、何か流れるようなものを感じた。ああそうか、僕はいま流れに逆らって歩いている。

いつものように周りに流され、されるがままにしていた状態から、流れに逆らおうとしているせいか、身体からひしひしと逃げたくなるような違和感が感じられる。

だけどそのまま流れに身を任せる気にはなれず、シンジはその場に立ち尽くしていた。

ゲンドウの目には感情の色は見えない。ただ物を見るように自分を見ていることも分かる。だけどそんなことは分かっている。自分だって父親と話しているつもりはない。

多少面識のある他人程度に考えて話していることに気がついて、つい、え？、というつぶやきを漏らしていた。

もちろん今更会いたいとも思っただけはなかったのは本当だ。だけど父をそんな風に考えることは無い。

…何が変わったのか。自分を客観的に見ていたから？少年の姿を見たから？

分からない、だけどこれは自分の意思だ。

「もついい。乗るのなら早くしろ、出なければ帰れ。人類の存亡を

賭けた戦いに、臆病者は不要だ。」

しびれを切らしたゲンドウが言った言葉は、シンジが想像していた以上に突き刺さった。

ああそうだ。いつもここで目をつぶってしまう。抗って先にあるものが分からないのが不安で、流れに身を任せるように状況に流される。

それは自分だけにこしたことではない。父も自分を避けて目をつぶってしまっている。それがすれ違いになるのかも知れない。だからこそシンジは足を流れの逆らう方向に向けた。

「僕は乗るとは言っていないけど、乗らないとも言っていない。だからその選択を今する必要はないし、僕には話す権利がある。」

「子供の戯言だ。」

「じゃあその子供に頼らなければ世界が救えない大人は誰？父さん。」

じつと相手の目を見続けて、目を逸らさなかった。

一方的に切られるのもそのまま話すのもいい。前を向いて見なければ逃げることも前に進むこともできない。選択肢が無くなってしまうのだ。どれが一番幸なのかも分からない内に。

「……………」

数秒間二人は対峙したまま沈黙の時間が流れた。相手がどう考えているかは分からない。だけど間違っていないと思える選択を自分は取った。だったら結果が何でも後悔しない。

「冬月、レイを起こせ。」

先に沈黙を破ったのはゲンドウが先だった。いや、シンジには待つ以外に起こることは無かったから、必然的といえる。

「使えるのかね？」

「死んでいるわけではない。こっちによこせ。」

その瞬間に時は動き出した。

「初号機のシステムをレイに切り替えて！」

最初に響いた赤木博士の言葉を筆頭に、慌ただしく作業を開始され

たのが、周りから聞こえるようになった作業音で理解できた。そう、父さんは逃げるといふ選択をしたんだね。

単に時間が無かったからかも知れないが、そうとはシンジは思えなかった。

まっすぐに見透かしていた目を逸らしたのがはつきりと分かり、微妙な緊張感が無くなるのが感じられる。

間違っではない。それでも考えてしまうのは、自分が子供だからだろうか。まったく、自分は何を父に望んでいたのだろう。

視線を下に降ろすと、まるで何かの重さに耐えかねたように、足に力が入らなかった。

「シンジくん!？」

葛城さんの心配する声が聞こえたけど、足に上手く力が入らない。慣れないことをした代償かと、口元だけで苦笑いした。

すぐに自分の代わりとなるパイロットは運ばれてきた。元々は自分がこのパイロットの代わりなのだから、多少食い違いはある。

あちこちを包帯で巻かれて荒い息をしている少女の姿は、誰がどう見ても痛々しいと言える。

ああ、この少女は見たことがある。

そう思った刹那――

カシャ

聞き慣れない音が頭の中に聞こえて、またか、と溜め息を漏らした。

『私は、信じてるわ。私が信じているのは、この世で碇司令だけ』

カシャッ

『貴方は死なないわ。私が守るもの。……さよなら』

カシャッ

『でも…生きていればいつか必ず、生きててよかったって思うときがあるよ』

なんなんだよ一体。

膝をついたままの姿勢でうねり声を上げたから、恐らく父の言葉にショックを受けたとも思うだろう。ある意味幸運なのだろうか。
…そう、君は…大切にしたかったんだね。だけどゴメン。僕は君じゃないし、見せられたとしても何もしてあげることはいできないよ。きっかけは分からない。少年の記憶。僕に何を伝えたいのだろうか。逆に、僕にどうして欲しいのだろうか。

情報処理が落ち着かない頭を押さえながら立ち上がり、もう一度少女の顔を見直した。

同じ年齢ぐらいの女の子がエヴァを操縦していたにも関わらず、不思議と自分の心は落ち着いていた。

「レイ、予備が使えなくなった。もう一度だ」

ゲンドウの声は無機質なまま聞こえたけど、少女はそれに答えて身体を起こそうとした。

しかしあちこちの包帯から分かるように、彼女の身体は悲鳴を上げているようで、それは表情からでも簡単に読み取れる。

彼女を守りたいと思った。だからこそエヴァに乗る決心をした。

あの少年の言葉が分からなくもない。だけど自分の中に浮かんできたのは、

「なぜ」と言う言葉だけだった。

なぜ、エヴァに乗るの？

なぜ、壊れそうな身体を動かそうとしている？

なぜ、なんのために戦うの？

かわいそうとは思っていない。それが彼女の信念だとしたら、そう思うのは失礼だと思うから。

分かった。決心はついた。

何をしろと言う訳じゃない。理由を定めることができた。

「…この音は…」

「気が付いてきたか…。」

来るべきこと、なんの理由かは分からないけど、少年はこの光景を見せてくれたから、だいたい理解することができた。

地震のように大きく揺れたジオフロントから、鉄骨や蛍光灯が落下したのが分かり、思わず頭を片手で庇った。

しかしそれと同時に少女の近くに何かが落下したのも分かってしまい、反射的に地面にを蹴っていた。

なげだされた彼女の身体を、自分をクッションにして、地面に直接当たりそうなのを防ぐ。

掴めば折れてしまいそうなきやしゃな手、荒い息。痛々しい手当の後視界に入ったそれらも見ても、自分が考えたのは、痛そうだな、の一言だけ。

さっきも言った通り同情はしない。だけど一言だけ言わなければならぬことがある。

「さっきはありがとう」

シンジは彼女の身体を静かに寝かせて、再びゲンドウに向き直った。

「父さん、僕はエヴァに乗るよ。」

その一言だけで空気が動いたのが分かった。

父は相変わらず動じない。そういう人なんだろう。

「だけどこれだけは言っておくよ。」

ひとつ置いて、シンジはもう一度口を開いた。

「僕は人類の存亡なんてものは関係ないし、さっきの子が死のうがどうしようが関係ない。僕は自分のためにエヴァに乗る。それだけだよ。」

その言葉に確かにゲンドウが口元で笑ったのが分かった。

別にいい。僕は逃げないし、立ち止まらない。

自分の選択肢にはたしかに間違いが無いと言い切れるから。

其ノ三 使徒、記憶（前書き）

適当に書けない……。短くサクサク書きたいのに……。二次創作らしくないな……。

まあ始まります。どうぞ。

其ノ三 使徒、記憶

驚くべきことは多すぎる。

突然下から湧き出てきた液体にしてもそうだし、赤木博士が言っているよく分からない羅列から、起動してからの光景。

真っ先に来たのは肺の中に取り入れられたLCSと呼ばれる液体で、肺の中に水が入る感触と直接酸素が身体に回っていく感じは、特に体感した事はないから慣れたものではないと思う。

液体の中だというのに冷や汗をかいたということは鮮明に分かる。

体内がぼんやりと熱くなり、手を握る強さが大きくなった。

緊張している……？

そう考えてすぐに違うと分かった。

ただ、怖い。

先が見えない。自分がどうなるのか、どんな目に合うのだろうか。

赤木博士が言っていたマニュアルでは、こういった考えもエヴァには影響が出る可能性があるらしい。

まるで生き物みたいだ。

それは本当に近いもののようで、頼りにできるという安心感を少しだけ生み出すことができた。

大丈夫、できる。

根拠は無い。だけどそう思ったのは、イメージがあるから。どうやって戦えば良いのか、分かるような気がするから。

あの少年にできて、自分にできないはずがない。そう思ったから。理由なんてそれだけで十分だ。

「碇司令、発射準備は完了しました。構いませんね？」

「ああ、始めろ」

無線を通して葛城さんが発進の命令を出したのが分かる。

その時には上からかかってくる圧力に思わず目をつぶり、そのすぐ後にそれは止まった。

辺りが、暗い。

その中でも首無しの胸にある赤いコアだけは、浮き彫りにして見える。

無機質な相手の顔からは、相手の表情さえも伺えず、気味が悪いという、思った以上に単純な考えが出てきた。

「最初安全装置解除、エヴァンゲリオン初号機、リフト・オフ！」
身体を固定していた器具が外れた。

なんにしてもどうするべきか分からない。

落ち着け、落ち着くんた。すべきことは教えてくれる。

誰が？

…分からない、だけど指示は出るだろう。

「シンジ君、とりあえず歩くのよ。意識を集中して歩くことだけ考えて！」

「…歩く、ですね？」

歩くことさえ分からない人物を乗せるとは、本当に作戦というものがあるかどうかさえ心配になってくる。

…作戦？違う、僕を乗せることに意味があつたのか？

とりあえず余計な雑念を忘れた。

歩く、そう歩くだ。

自分が普段するようにイメージして、一步目を踏み出した。

「歩いた！！」

だれかの歓喜の声が聞こえてきたけど、誰かは分からないぐらい耳には入らなかった。

次は…次はどうする？

止まれ…いや、止まらない？

自分のイメージができていなかったのか、エヴァはもう一步と歩き続けている。

くそ、意外に言うことを聞かない性格なんだね。

せめて嫌みを込めて思ったつもりでも、相手の反応があるはずもない。

どうする…、ああもう！そのまま行け！

とにかく走ることをイメージして首無しにつっこんだ。あくまで頭を庇うように手を前にすることも反射的に考えて、なんとか体当たりをしようとした。

しかし誤算なのは相手も生きている生命体だということ。庇った分前が見えず、首無しは少し身体を反らしただけで体当たりを避けた。当然走ることだけを考えていたから、そのままビルに直撃することになる。

額や身体中に痛みを感じることに、初めて違和感を感じた。

自分はここにいる。ビルにぶつかったのはエヴァだ。

じゃあなんで自分の身体が痛くなる？ここは四方八方液体の中だ。痛覚が反応する要素など無い。

「シンジくん！早く起き上がって！」

ミサトの悲痛な声は混乱している頭にはうまく伝わらず、シンジが気が付いた時にはその違和感とやらが顔の辺りに来て、首無しに捕まれたことが先に脳の中に入ってくる。

違う、掴まれているのは僕じゃない、エヴァだ。

理性ではそう分かっているはずなのに、はつきりと感触を露にしている身体の方は正直だ。

首無しがもう片方の手でエヴァの手を掴んだことまで分かる。

そうして今度は千切られるかと思うほどの痛みが腕に走り、自分でも信じられないほどの叫び声をあげていた。

「落ち着いてシンジくん！掴まれたのは貴方の腕じゃないわ！」

それを信じると言う方が無理な話である。現に身体は反応し、まだ首無しに握られている感触も残っている。

そしてその握られた力がだんだんと強くなり、嫌な予感が頭の中を駆け巡った。

嘘だ…やめろ…！

バキッ

その音はエヴァの腕が潰された音なのか、痛覚だけを感じた脳が反射的に聞かせた音なのかは分からなかった。

ただひとつ、エヴァの腕がどうなっているかを確認する前に、シンジには腕から同じ種類で大量の情報が頭の中を貫いた。

「あああああああ！！」

初めて無理矢理腕を折られた感触に、反応した声が耳に響く。

痛い、いたい、イタイ

嘘だ、こんなの嘘だ。

通信から誰かの叫ぶ声が雑音に聞こえて、頭の中を引っ掻き回したような痛みが腕から伝わってくる。

考えられない、どうすればいい？分からない、怖い。

「逃げて、シンジくん！」

どうやって！？何処へ！？

嫌だ、助けてよ、僕はどうすればいいんだよ！？

『蹴り飛ばせ』

その声は確かに聞こえた。

懐かしい波長の声、聞いたことがないはずなのに概視感に近いものがたしかにある。

え……？どういう……？

『簡単だよ。蹴り飛ばせばいい。こんな風にね』

自分の片方の手に声の主の手が重なり、動いた。

エヴァは首無しを押し返すように蹴り飛ばし、破損していない方の手を地面について、倒れそうになる身体を庇って座った。

通信を通してオペレータ達が驚愕している表情が伺える。

自分でさえも何が起きたのか分からない、いや、分かっているけど納められない。

「君は、どうしたい？」

声の主が自分のすぐ後ろから聞こえる。

おもむろにシンジは後ろを見た。そしてそこにいたのは自分と瓜二つの顔を持った少年。

電車の中の夢、スライドショーのように見せられた記憶、自分の視界に入っている少年。

すべて、面影が重なった。

どうということ？君は…。

「違う、質問をしているのは僕。答えて。君はどうしたい？」

分からない、けどたぶん…なんとかしたい。目の前の使徒を倒したい。

「それはなぜ？」

意地があるから。

「意地？」

僕は言った。自分の為にエヴァに乗ると。父さんに言ったから。

「…世界のため、綾波の為に戦うとは思わなかったの？」

うん、世界のためなんて言われてもそのために戦えるほど僕は強くないし、彼女は覚悟していたよ。たとえ僕が乗らなくても、僕の代わりにエヴァに乗ったと思う。彼女は僕に守られる事を望んでいない。だから僕は彼女のためには戦わない。

「……………」

ごめん。姿は似ていても僕は君じゃない。

彼女を大切にしたいと思ったのは知っている。だけど…僕は意地を守りたい。

くだらないことだっていうのは分かってる。だけど戦うことに理由が無いから、自分のために戦う事しか考えられない。

それに、あそこまで言っというて何もできないっていうのも悔しいか

ら。

『……………そう』

失望した？

『ううん。むしろ安心した。十分すぎる理由だよ』

彼は少し寂しそうな顔をした後に、キツと首無しに向き直った。

『イメージするんだ。エヴァを動かしている最高の自分を。エヴァは君の一部であり、君はエヴァの一部だ。君が信頼すればエヴァは必ず答えてくれる。』

… 具体的にはどうすればいいと思う？

『言ったでしょ？ 蹴り飛ばせ、殴れ、泣いて膝をついて謝っても殴り続ける。痙攣さえしないぐらいに挽き肉になるまで踏み潰せばいい。簡単でしょ？』

それきり彼の声は聞こえなくなり、すぐ近くにいるような雰囲気は無くなった。

彼は何なんだろう、だとか、どうして、だとかの問いは今は関係ないと分かる。

集中、エヴァは僕の一部で、僕はエヴァの一部だ。

その瞬間に飛び掛かってきた首無しを見たとき、エヴァは最低限の回避を行い、カウンターをするようにコアの辺りに拳をぶつけた。
「……！」

通信の向こうで驚愕している声が聞こえてきたような気もしたけど、もうそんなことはどうでもいい。

当然殴られた衝撃で倒れた首無しに向かってマウントをとり、とにかく殴った。

何を殴っているのか分からないけど、問答は無用だと思う。殴っている、ということはダメージは少なからずあるはずだから。

殴られ続けられた首無しも無抵抗な理由は無く、エヴァの腹部を蹴って距離をとり、互いに間合いが生まれた。

「どういうこと！？シンジ君がなんであんな動きを…？まさか暴走…？」

「ありえません！シンクログラフはプラスのままで、制御神経は繋がったままです！」

使徒の強さがどうであれ、あの状況でエヴァが攻撃に出ると思わなかったから、ざわめきや驚きの声も上がった。

各々がモニターを玉視し、その光景をみているだけ。『葛城さん武器は！？』

意表を突かれたシンジからの声に、思わず

「え…？」と抜けた声が出る。

『武器は何か無いのって言うてるでしょ！？早く！！』

すぐに自分の中で問いの答えを考えて口に出した。

「プログレッシブナイフがあるわ！使って！」

そう、自分が混乱するわけにはいかない。あの子はもっと大変な状況にある。自分が落ち着かなくてどうすると言っただ。了解と言わんばかりに、エヴァはすぐにプログナイフを装備した。

どうやって武器を取り出すか、考えない内に身体が動き、肩のプログナイフを取り出して掴んで、それを手の中で逆手持ちに変えた。強力な武器と言っわけではないだろうけど、少なくとも人間と同じで素手よりかはマシだ。

あくまでどうやって倒すか考える。コアを潰せばいい。それが一番早くて効率的だと思う。しかし一度殺されそう、いや現在進行形で殺されかけてる相手に対して、接近すると思うだけでも身体はおおのいている。

構ってられるか。

そんな感情があったから、シンジはエヴァを首無しに向かって走った。

「！！！」

危機を直感した首無しが手らしきものをこちらに向けてきて、それが不自然に光ったと思い、シンジはその手折れた手でを掴んで下に向けた。

腕の痛みが身体を走る。しかしそれでも水平に向けている手を、下に向けてるのは十分だ。

発射された光線は地面を抉るがシンジはそれを見ずに、首無しの掴んでいた辺りの手首を手前に引くようにプログナイフを動かして切り落とす。

痛みゆえに倒れると考えていたが、相手もそれは死亡するに等しいと考えたのか、もう片方の手をこちらに向けて光線を放ったため、地面を蹴って身体をそらし回避した。

手が一本ずつで対等になったな。

微かに思い、着地と同時に地面を蹴り、首無しに向かって走った。

!!!!

壁、見えない壁が目の前に現れたかのようにエヴァはぶつかって止まり、シンジは鼻先をぶつける痛みを感じた。

「ATフィールド!!」

通信から聞こえた声から、目の前にあるこの赤い光の壁の事を指すんだと分かったが、内心では文句を言いたい。

事前に説明しろ、相手がどんな特性の可能性があるのか、どう戦えばいいのか、これを本当に作戦と呼ぶのか。

文句は腐るほどある。しかし頭の中で何をすべきか分かるのかは、さっきの彼のお陰なんだろう。

正直…彼が居なかったらどうなっているのかも分からない。しかし猫の手も借りたい状況に、相手が何なのか確かめる暇は無いし、確かめる必要は無い。

思い出せ、考えろ、イメージするんだ。彼のタタカイを。

『ATフィールド、展開』

頭の中で言ったのか彼が言ったのかは分からない。だけど起こることとは同じだ。

ATフィールドの中和した部分、そこにプログナイフを突き刺し、入った狭い亀裂を無理矢理広げた。

こじ開けたと同時に首無し目の目の辺りが光ったのは、おそらく手の方と同じような光線でも出すつもりだと思う。

大丈夫、エヴァを信じる。

「あああああああ！」

どうやったのかよく覚えていない。光線は赤い光の壁を張って首無しごと吹き飛ばした記憶はある。

蹴り飛ばせ、殴れ、泣いて謝られても問答無用で踏み続ける！

エヴァは吹き飛ばした首無しを追うように飛び掛かり、その勢いでコアを踏み潰す。その後低い姿勢にもっていつてプログナイフをコアに突き刺し、踏みつけてプログナイフを深く突き刺した。

ふと、首無しの目が光ったのが、光線を出すためではないと判断できたのは、不自然さが出ていたからだろう。

まさか…自爆！？

一気に身体を起こした首無しがエヴァに絡み付くように抱きついてき…。

あ……。

エヴァに乗っていた記憶は、そのつぶやきを最後に、一瞬で真つ暗な闇の中に落ちていった。

其ノ三 使徒、記憶（後書き）

腕の神経回路切れてんじゃないの？

突っ込んだら負けだと思う。

少したったら補足説明しないと訳が分からなくなりそうだから、
い
つか作ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5037f/>

The second select from EVA

2010年10月10日13時10分発行